

Miscellaneous Notes on Japanese Pteridophytes (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00056378

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



芹沢俊介* : 日本産シダ植物雑記 (一)

Shunsuke SERIZAWA* : Miscellaneous Notes on Japanese Pteridophytes (1)

日本の暖地性シダ植物フロアの研究は、最近20年ほどの間に、故倉田悟先生の手によって著しく進められた。先生は独特の鋭い目でシダ類の変異をくわしく観察され、それまで気付かれなかった多くの新種や種間雑種を認識された。

ところが、先生の研究は、不幸にも先生の突然の死によって中断されてしまった。しかし、日本のシダ植物の中には、まだまだ未解決の種類がたくさん残されている。そこで、私も整理の都合上、手もとにある私自身の採集品や各地のフロアを研究している方々からいただいた標本の中の問題品をぬきだして検討してみた。今回はそのうちイヌワラビ類の5新雑種を報告する。本稿をまとめるにあたり、資料を送ってくださったり自生地を案内して下さったりした多くの方々に、深く感謝いたします。

1. オオアオグキイヌワラビ (新称)

アオグキイヌワラビ *A. viridescens* は、九州の低山地に分布する葉柄が緑色のタニイヌワラビ類の一種である。屋久島のヤクシマタニイヌワラビに似た種類であるが、葉柄の色のほか、葉が大形で羽片も多く、羽軸表面の棘状突起が明瞭であることなどで容易に区別できる。私がこのシダをはじめて採集したのは、1966年7月に城戸正幸氏に鹿児島県大口市布計の山を案内していただいた時のことであるが、その時同所に混生するツクシイヌワラビとの雑種と思われるシダも採集した。この雑種はその後ずっと採集する機会がなかったが、昨年夏に再び布計で良好な資料を得たので、オオアオグキイヌワラビと命名することにした。

本雑種はツクシイヌワラビとアオグキイヌワラビのほぼ中間の形態をしており、前者からは葉柄や中軸下部が緑色になり、羽片、小羽片はやや多数つき、小羽片はほぼ独立することなどで、後者からは小羽片が大きくて厚く、やや込みあってつき、小羽片基部の角度も広く、羽軸はあまり葉面からうきあがらないことなどで区別される。胞子はよく形成されるが不定形である。見かけ上はヤクツクシイヌワラビ (ツクシイヌワラビ×ヤクシマタニイヌワラビ) やナンゴクイヌワラビ (ツクシイヌワラビ×タニイヌワラビ) にも似ているが、本雑種の葉柄は緑色であるから、識別は容易である。ナンゴクイヌワラビか

らは、葉柄基部の鱗片がより密生し、赤褐色で黒くならないことでも区別される。

2. タニサキモリイヌワラビ (新称)

サキモリイヌワラビ *A. oblitescens* は、西日本の主として日本海側に分布するタニイヌワラビ類の一種である。太平洋側では三重県朝熊山などにもあるが、産地はごく少ない。見かけ上はイズイヌワラビ (タニイヌワラビ×ヒロハイヌワラビ) に似ているが、葉質がより厚く胞子が正常であることで区別できる。葉身は通常三角状卵形、羽片は比較的少数、羽片の柄は明瞭で長さ2~5mmになり、小羽片は概して大形である。しかし、この種の形態には相当変異があり、中には葉身が楕円形に近づき、葉質が薄くなり、小羽片の耳垂もやや発達して、カラタニイヌワラビ (カラクサイヌワラビ×タニイヌワラビ) に似た印象を受けるようなものもある。

タニサキモリイヌワラビは、このサキモリイヌワラビとタニイヌワラビの雑種と推定されるシダで、前者からは葉質が硬く、羽片がやや多くて12対くらいになり、葉縁の鋸歯もより明瞭であることなどで、後者からは葉質がやや厚く、羽片の柄が長く、小羽片はやや大形で柄は多少なりとも有翼、その結果小羽片は多少羽軸に沿着するように見えることなどで区別される。胞子はよく形成されるが不定形である。ナンゴクイヌワラビにも似ているが、葉質はやや軟かく、羽片の柄は明瞭、葉柄基部の鱗片はより黒味が強いの。

本雑種は最初福井県一ツ谷で発見したものであるが、その後栗田都男氏に岐阜県水鳥谷を案内していただいた際、更にわかりやすい資料を得ることができた。このシダの胞子が不定形であるということは、タニイヌワラビとサキモリイヌワラビを種の階級で区別する見解に、一つの支持を与えるものであろう。

3. ニセハツキイヌワラビ (倉田, 1975年)

サキモリイヌワラビとホソバイヌワラビが混生している場所には、しばしば両者の雑種と推定されるシダが生育している。このシダは両者のほぼ中間の形態をしており、前者からは葉の切れ込みが深く、葉質が薄く、小羽片中肋表面に短い棘状突起がでること、後者からは逆に葉の切れ込みが浅く、葉質が厚く、小羽片中肋表面の棘状突起が短いことで容

*愛知教育大学生物学教室 Department of Biology, Aichi Kyoiku University, Kariya-shi, Aichi 448.

易に区別できる。胞子のうは通常不稔性であり裂開せず、胞子は不定形である。既知のシダの中ではハツキヌワラビ(ホソバイヌワラビ×タニヌワラビ)に最もよく似ているが、葉はくすんだ緑色で葉質が厚く、葉の切れ込みが浅く、小羽片は丸味をおび、やや大形、羽軸に沿着する傾向が強く、中肋表面の棘状突起は短く、胞子のう群もやや長いことなどで区別される。葉軸上の無性芽は、私の検討した標本ではつけていない。

本雑種ははじめ鳥取県久松山で1973年6月に採集したものである。この組合せの雑種には倉田先生が日本シダの会会報2巻23・24号(1975)でニセハツキヌワラビという名を与えているので、和名はこれに従う。

4. ヤマホソバイヌワラビ(新称)

ホソバイヌワラビとヤマイヌワラビの雑種と推定されるシダである。形態的には上記2種のほぼ中間の特徴をそなえており、前者からは葉の切れ込みが浅く小羽片中肋表面の棘状突起が短いことで、後者からは葉の切れ込みが深く棘状突起が目立つことで、容易に区別できる。胞子はよく形成されるが不定形である。葉軸上の無性芽は、私の検討した標本には見られない。ホソバイヌワラビとヤマイヌワラビの中間的な特徴を持つ種類として記載されたトゲヤマイヌワラビ *A. spinescens* からは、小羽片が細くて多数(14~19対)つき、小羽片一つあたりの裂片の数(6~9対)も多く、胞子が不定形であることなどで異なる。また、本雑種の葉柄は通常多少なりとも紫色を帯び、トゲヤマイヌワラビのように緑色ではない。ユノツルイヌワラビ(ホソバイヌワラビ×ヒロハイヌワラビ)やヒサツイヌワラビ(カラクサイヌワラビ×ホソバイヌワラビ)にも似ているが、前者からは葉質が薄く、羽軸の短毛が少なく、胞子のう群は短く鉤形のものが多いことなどで、後者からは下部羽片の柄が短く、小羽片の耳垂が発達せず、胞子のう群に鉤形のものが多いことなどで区別できる。両親がいずれも普通種であるため、本雑種も各地でみつかってよさそうであるが、現在までに確認できた資料はそれほど多くない。

なお、京都府京都市比叡山(芹沢12662)、宇治市二ノ尾(同29541)、宮崎県小林市吉牟田(同25222)などには、トガリバイヌワラビとヤマイヌワラビの雑種と推定されるシダがある。これらのシダは本雑種に比べ小羽片が幅広く、その切れ込みも深い傾向があるが、はっきりした区別は困難である。

5. ヤマヒロハイヌワラビ(新称)

ヤマイヌワラビとヒロハイヌワラビの雑種と推定されるシダである。このシダも両母種の間の特徴をしており、前者に比べ葉身が幅広く三角状広卵

形、先端は急に細まって尾状となり、葉質はやや厚く、包膜は長くて鉤状のものが少なく、後者に比べ葉は大形で切れ込みが深く、羽片も多く7~11対つき、小羽片は少くとも大きなものは中~深裂、数も多く25対に達し、包膜は鉤形のものが多い。胞子はよく形成されるが不定形である。葉の色もヤマイヌワラビより黄色を帯び、ヒロハイヌワラビより緑が濃く、野外で識別する時によい手がかりとなる。

本雑種ははじめ神奈川県箱根で1966年6月に採集したものであるが、その後久しく再採集する機会がなかった。ところが1977年春に生田耕蔵氏に京都山科産の良好な標本をいただき、同年秋にはその自生地も案内していただいた。基準標本には、その時の採集品を選定することにする。

1. *Athyrium* × *satsumense* SERIZAWA, hybr. nov.

Athyrium kuratae SERIZAWA × *Athyrium viridescens* KURATA

Ab anteriore stipite viridi, pinnis pinnulisque multioribus, pinnulis vix adnatis differt; a posteriore costis vix erigentibus, pinnulis majoribus crassioribus basi late cuneatis differt.

Hab. Kyushu. Pref. Kagoshima: Fuke, Oguchi-shi, alt. ca. 550m (S. SERIZAWA no. 30279, Aug. 2, 1979, AICH-holotype); ibid. (S. SERIZAWA no. 2311, July 30, 1966, AICH).

2. *Athyrium* × *awatae* SERIZAWA, hybr. nov.

Athyrium oblitescens KURATA × *Athyrium atoporum* (MIQ.) KOIDZ.

Ab anteriore lamina rigidiore, pinnis multioribus usque 12-jugis, segmentis margine conspicue serratis differt; a posteriore pinnis breve petiolulatis, pinnulis majoribus in costis plus minusve adnatis differt.

Hab. Honshu. Pref. Fukui: Hitotsu-dani, Nadasho-mura (S. SERIZAWA no. 27057, Sept. 25, 1977, AICH). Pref. Gifu: Mitori-dani, Neo-mura, alt. ca. 200m (S. SERIZAWA no. 30656, Sept. 16, 1979, AICH-holotype); ibid. (S. SERIZAWA no. 28878, Oct. 15, 1978, AICH).

3. *Athyrium* × *inabaense* SERIZAWA, hybr. nov.

Athyrium iseanum ROS. × *Athyrium oblitescens* KURATA

A. × *pseudo-iseano* simile, sed lamina crassiore minus dissecta, pinnulis majoribus in costis plus minusve adnatis, soris longioribus differt.

Hab. Honshu. Pref. Gifu: Kanzaki, Miyama-

machi (S. SERIZAWA no. 30603, Sept. 15, 1979, AICH); Konjima, Miyama-machi (S. SERIZAWA nos. 30635-30639, Sept. 16, 1979, AICH). Pref. Kyoto: Daigo, Kyoto-shi (S. SERIZAWA nos. 27129-27131, Sept. 26, 1977, AICH). Pref. Tottori: Mt. Kyusho-zan, Tottori-shi, alt. ca. 40m (S. SERIZAWA no. 18441, June 21, 1973, AICH-holotype). Pref. Yamaguchi: Negasa, Mikawa-machi (S. SERIZAWA no. 27317, Oct. 9, 1977, AICH).

4. *Athyrium* × *pseudo-spinescens* SERIZAWA, hybr. nov.

Athyrium iseanum ROS. × *Athyrium vidalii* (FR. et SAV.) NAKAI

A. spinescenti simile, sed pinnulis anguste ellipticis multioribus 14-19-jugis, segmentis pinnularum multioribus 6-9-jugis, sporis irregularibus differt.

Hab. Honshu. Pref. Saitama: Arima-dani, Okumusashi, Naguri-mura (K. SUZUKI no. 4769, Sept. 12, 1973, AICH). Pref. Gifu: Nichihara,

Miyama-machi (M. MURAMATSU s.n., Nov. 19, 1974, AICH). Pref. Kyoto: Yamashina, Kyoto-shi, alt. ca. 250m (S. SERIZAWA no. 27167, Sept. 26, 1977, AICH-holotype). Kyushu. Pref. Kumamoto: Iiboshi-otaki, Itsuki-mura (S. SERIZAWA no. 25142, Aug. 9, 1976, AICH).

5. *Athyrium* × *pseudo-wardii* SERIZAWA, hybr. nov.

Athyrium vidalii (FR. et SAV.) NAKAI × *Athyrium wardii* (HOOK.) MAKINO

Ab anteriore lamina crassiore late deltoideo-ovata apice caudata, soris longioribus differt; a posteriore pinnis multioribus 7-11-jugis, pinnulis saepe pinnatifidis vel pinnatisectis, soris unci-formibus mixtis differt.

Hab. Honshu. Pref. Kanagawa: Hatajuku, Hakone-machi (S. SERIZAWA no. 1897, June 12, 1966, AICH). Pref. Kyoto: Yamashina, Kyoto-shi, alt. ca. 250m (S. SERIZAWA no. 27171, Sept. 26, 1977, AICH-holotype); ibid. (K. IKUTA no. 14603, May 30, 1976, AICH).

○ 熊木義房著 原色北陸の花 北国出版社(〒920 金沢市香林坊2丁目5-1)発行(昭和55年5月20日), A5版, 238頁, 定価4,400円

著者は昭和50年, 金沢大学教授を停年退官されるまで, 教育学部で30年余り, 御専門の園芸学の講義及び研究に従事された。御退官後は北陸学院で, 教育・研究を続けられている。

本書の写真は, 御自身で撮られたもので, 御自宅に栽植のものが主となっている。次いで北陸学院およびその附近のものが多い。したがって, 園芸品もあれば, 野生のものもあるという具合に多彩で面白いが, 逆に言うと, その為に, 内容がどちらとも的がしぼれないのが惜しまれる。しかし, 著者の花好きには全く敬服の至りである。

○ 奥原弘人・千村速男共著 信州の高山植物 信濃毎日新聞社(長野市南県町657)発行(昭和55年7月10日), 18.5×13.5cm, 388頁, 定価2,600円。

信州は山を廻らしている。しかも高い山が多い。この地に生れ育ったならば, 朝夕仰ぎみる山々に関心を持つはづである。著者の一人, 千村速男氏は木曾郡上松町に生まれ, 15歳ごろから山登りをはじめ, 以後30数年にわたり, 山と花に魅せられるまゝ, 信州の高山は各ルートすべてを踏破されたという。本書の写真は, この間に写された2万枚を超すカラースライドから厳選して1,000枚を残したと言われるだけにすばらしい。その中には信州特産の種類や同一種でも花色の変化や八重咲・奇形など多くの変異が取り上げられているのが楽しい。また解説は半世紀にわたって信州の植物の研究に従事し, 信州の植物を知りつくして居られる奥原弘人氏が執筆されただけに要領よくまとめられている。

○ 金古弘之著 郡上郡植物目録 B5版, 124頁, 自費出版(1980年6月1日発行)

郡上郡は岐阜県の北部に位置し, 裏日本植物が裏日本に進出する地域であり, 日本海側の植物と太平洋側の植物との接触地帯という興味ある問題を有している。

著者はこの郡上郡にはじめて奉職されてから10有余年を経過した。この間倦まず撻まず郡上の植物と四つに取り組んで来られた結果が, この書となったわけである。著者はまえがきに“郡上の植物を採集しはじめて十有余年にもなるので, 自分の気持を新たにするために印刷することにした”と記して居られる。

紹介者は, その労に対して敬意を表するとともに, 今後益々研鑽を積まれんことを祈っている。

(里見信生)